

大学院助産師養成課程修了生の卒後1年目の 助産実践能力に対する評価 ——新卒助産師とその上司による評価——

緒方 京, 恵美須文枝, 志村千鶴子, 大林 陽子, 神谷 摂子

Evaluation of Midwives' Competence by Themselves and Their Superiors in First Year after MA Graduation

Miyako Ogata, Fumie Emisu, Chizuko Shimura, Yoko Obayashi, Setsuko Kamiya

研究目的は、大学院で助産師養成課程を修了した新卒助産師（以下、修了生）の卒後1年時点における助産実践能力の評価を、修了生本人、及びその上司の視座から明らかにすることである。研究方法は、A大学院の平成23年3月修了生で研究参加に同意の得られた6名に、卒後約1年を経過した時点で日頃の助産実践についてグループインタビューを行い、同時期にその修了生の上司5名に修了生の仕事ぶりについて半構造的個別インタビューを行った。分析の結果、修了生についての評価内容は修了生・上司ともに「助産師としての志向性」、
「実践場面での判断・ケア技術」、
「人間関係やチームワーク」、
「表現力や向上心・探究力」の4つに分類された。修了生は、「助産師という職業に対する意識の高さ」、「他の新卒助産師と同等の判断・技術力」、「妊娠褥婦の状況に合わせて寄り添う姿勢」、「周囲の人々との関係性を築きながら先輩助産師の指導を素直に受けとめ、課題に建設的に取り組む態度」を助産実践能力として有していることが明らかとなった。

キーワード：助産師教育、大学院教育、新卒助産師、助産実践能力

I. 緒 言

わが国における大学院での助産師教育は始まったばかりであり、平成16年の天使大学の助産専門職大学院開設を契機として、平成24年4月時点での教育機関数は21大学院となった。大学院教育には、高度の専門的知識・能力の育成に特化した実践的な教育による高度専門職業人の養成が求められている¹⁾が、助産師教育を行う大学院で強化すべき「高度な専門性」の内容の明確化²⁾や、教育の成果については、未だ模索段階にある。国内では学士課程での教育から大学院へ助産師教育の移行が進展しつつあるが、大学院修了生の助産実践能力に関連する研究は少なく、学士課程との比較研究、専門職大学院の修了生の評価など³⁾⁻⁵⁾、ごく限られた見解のみで、専門職大

学院でない従来型の大学院修士課程における助産師教育の意義や成果については、明らかにされていない。

特定非営利活動法人日本助産評価機構が定める「助産専門職大学院自己評価の評価基準」⁶⁾によれば、教育内容及び方法の改善を図るためのFD体制についての解釈指針として「学生による授業評価及び教員による授業評価に加えて、就職先等からの評価を実施することが望ましい」とされている。教育をした者・受けた者のみならず修了生を受け入れた側の評価は、現在及び今後の助産師教育を検討する上で必須である。

そこで、従来型の大学院修士課程（以下、大学院とする）における助産師養成課程を修了した新卒助産師はどのような助産実践能力を発揮できているのか、社会から求められている新卒助産師としての助産実践にはどのように対応できているのかを調査することにした。

本研究の目的は、大学院の助産師養成課程修了生が、卒業後1年目の時点においてどのような助産実践能力を有しているか、新卒助産師である修了生本人とその上司の視座から評価を明らかにすることである。

本研究における用語の定義は、

「助産師教育」：修業年限や設置主体に関わらず、助産師国家試験受験資格を取得するための助産師養成機関における教育

「新卒助産師」：助産師免許を取得後まもなく助産師として就職して1年以内の者で、看護師として就業したことがない者

「助産実践能力」：助産業務のうち、妊産褥婦・新生児へのケアを提供するための、知識・技術・技能の程度、及び助産師の職務に取り組む姿勢・態度とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 対象及び調査方法

1) 対象

研究対象は、A大学の大学院における助産師養成課程（旧規定の23単位）修了生で、平成24年3月現在、助産師国家資格を取得して入職後およそ1年を経過し、研究参加に同意を得られた人、及びその直属の上司である病棟師長または主任クラスで、修了生の1年間の勤務状況やチームでの活動状況がよくわかる方で研究参加に同意を得られた人とした。

2) 調査方法

調査方法は、修了生、上司ともに、インタビューガイドに基づく半構造化のインタビューとし、プライバシーが確保でき、研究参加者が希望する個室で実施した。

修了生には、大学院で受けてきた教育のプロセスや内容の想起を容易にし、互いの体験を聴きながら1年間の自己の体験を豊富に語ってもらうため、90分程度のフォーカスグループインタビューを行った。その際、修得したカリキュラムが時系列でわかる図を提示し、直接教育に関わらなかった第三者によるインタビューとした。内容は、①入職後約1年間の現場実践経験の概要（うまくいっていると思うこと、困った・困っていること）、②

大学院での学びの振り返り、③今後の計画、④他校の卒業生と自分が異なると感じる点、変わらないと感じる点とした。

上司については、60分程度の個別インタビューとし、その内容は、修了生の1年間の働き方を通して感じる、①職場への適応状況や傾向・特徴、②他の新卒助産師との類似点・相違点、③大学院で養成された助産師のイメージと実際、④大学院での助産師教育への期待・希望とした。

それぞれの面接内容は、研究参加者の了解を得てICレコーダーに録音し、データを正確に解釈するために必要時にメモをとった。

3. 分析方法

修了生、上司それぞれの逐語録を作成し、研究者間で丹念に読み、修了生に特徴的なこと、それに関連する教育内容・方法について語られている文脈を抽出した。抽出された文脈から、更に研究目的に沿って助産実践能力に焦点を当てて重要事項を取り出し、その意味の類似性・相違性に基づいて継続的に比較しながら分類した。次に、分類された複数の事項から浮かび上がってくるテーマを抽出し、テーマ別にカテゴリー化して内容を適切に表現するカテゴリー名を生成した。

データの解釈及び分析においては、客観性が保たれていることを助産学教員、及び助産師教育に関する研究者間で確認しつつ検討を重ね、分析の妥当性と確実性を保証することに努めた。

4. 倫理的配慮

本研究に先立ち、愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得た（23愛県大管理第12-51号）。研究参加者へは、研究の概要を文書と口頭で説明し、文書による同意を得た。特に修了生には、あらかじめ、上司にも同様のインタビューを行うことを伝え、調査協力の同意を得た。研究参加者には、自由意志による参加の保障、目的外でデータを使用しないこと、修了生のデータを上司に、あるいは上司のデータを修了生に提供しないこと、データの厳重な管理、研究成果公表時の匿名性の保全を約束した。また、研究参加者に対し、個人情報保護の観点から、グループインタビューの参加者名や他の参加者のインタビュー内容は他言しないように協力を求め、同意を得た。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の背景

研究協力の得られた修了生は6名で、全員が大学看護学部を卒業後、直接大学院に入学し、病院の産科系混合病棟に就職していた。上司は5名で、病棟師長が4名、主任が1名で全員が助産師であった。大学院で助産師教育を修了した新卒助産師受け入れ経験の有無については、「経験あり」が4名で、年間の受け入れ人数は1~5名とばらつきがあり、「経験なし」は1名であった。

2. 修了生へのインタビュー結果

1) 修了生の自己評価 (表1)

修了生本人による自己評価に関する分析結果を表1に示した。それらは、〈助産師としての志向性〉、〈実践場面での判断・ケア技術〉、〈人間関係やチームワーク〉、〈表現力や向上心・探求力〉の4つの視点に分類することができた。

以下の本文では、カテゴリーは【 】で示し、研究参加者の語りは字体を変えて記載する。

(1) 〈助産師としての志向性〉

このカテゴリーは、助産師としての気持ちの持ち様、仕事への愛着、取り組みへの熱意を示す内容であり、【助産師だからこそのできることをしていきたい】、【ケア場面がやりがいになっている】、【助産師としての自分の将来を思い描いている】で構成された。

【助産師だからこそのできることをしていきたい】は、自分が本来ありたいと思っていた助産師としての姿を強く意識していたことから抽出された。「先輩助産師が目標」と語った修了生は、

産後（赤ちゃんが泣いて）寝れなくてすごく大変なときに、部屋の人にも気を遣って、私たちにも気を遣って……。先輩（助産師）がその（大部屋に一緒にいるとき、褥婦さんの）ちょっとした不自由さに気づくことで、（褥婦さんは）「この人、気づいてくれた。私のこと見てくれて気にかけてくれる」とすごく思うみたい（ということが私にわかって）。ちょっとした会話から、その前とは違った気持ちで過ごせてもらえるのかなあと思った。どんなに忙しくても業務の配分をしながらそれをして。助産師としてプロと言うと大げさだけど、「こういうののかな、助産師さんって」って思いますね。

と語った。別の修了生は、大学院教育の中で様々な助産師と出会い、助産師の仕事の深さ・幅広さ・時間的マネジメントを見てきた経験から、今実践したい助産師としての仕事を挙げた。

【ケア場面がやりがいになっている】は、

辞めたい、と（いう思いに）なっても、おかあさん（妊産褥婦）たちから「居てくれたから自分も頑張れた」とか（中略）言われると「もうちょっと頑張るかな」って（中略）……。（おかあさんたちが）投げかけてくれている感があります。

と表出されたように、ケア対象からお産に満足したと言ってもらえた経験や、様々な家庭の事情を抱えた妊婦・褥婦の気持ちに寄り添う実践への思いから抽出された。

(2) 〈実践場面での判断・ケア技術〉

このカテゴリーは、助産師としての臨床的な判断、提供する技術のレベルや内容を示し、【期間が空くことや実習病院との施設差に惑わされず分娩介助できる】、【超音波検査の判読ができる】、【退院後の予測が立てられる】、【他の新卒助産師との技術差は感じない】、【複数の対象者を受け持つとあたふたする】、【母乳に関するケアがわからず自信がない】で構成された。

【期間が空くことや施設差に惑わされず分娩介助できる】は、

自分は（実習で）15例もとっているし頑張れる。（学生時代に）すごくいろんな経験をさせてもらっているから、そういう面では良かったと思いながら仕事できている。（中略）余裕を持ってできるころはありますし、（中略）学生時代、（分娩経過の長い産婦を多く受け持ち、）指導者さんと相談しながら、困ったら先生（教員）に相談したりしてやっていたので、（お産を）進めるときは進めるけど、（自然な経過を）待てる自信、待てる気持ちが持てるのは学生時代のあの経験があったから良かった。

と語り、実習での経験が今の自分を支えているとしていた。また、別の修了生は、大学院での実習終了から数ヵ月を経た入職後の分娩介助について、

（1年次の実習で）13（例）とったのは（半年後も）全然無駄になっていなくて、（2年次に）2例やったときに、相手は変わるけど、でもそんなに大きく変わらないというのも自分の中で思えた。今1年経って4例しかやっていないんですけど、きっと（感覚は）変わらないから落ち着いて同じことをやれば、

表1 修了生の自己評価

カテゴリー	サブカテゴリーを説明する代表的な語りの要約 (斜体はnegativeな語りの要約)	
助産師としての志向性	助産師だからこそのできることをしていきたい	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 母子をペアで産前から産後の流れの中でケアできる助産師の強みを生かしたい ▶ 忙しくても業務配分しながら手間をかけて丁寧に産婦・褥婦に寄り添う助産師でありたい ▶ 混合病棟においてもお産を中心に女性と関わる仕事をしたい
	ケア場面がやりがいになっている	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 自分が介助したお産に産婦さんから満足できたと聞けると嬉しい ▶ 分娩介助した人と電話訪問等で退院後も信頼関係が継続できることが嬉しい ▶ 褥婦さんたちがとても楽しそうに母乳を飲ませている姿を見られる ▶ 入院した妊婦に耳を傾けると抱えている気持ちを自分に吐露してくれる
	助産師としての自分の将来を思い描いている	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 何年経験を積んでも産婦の視点で考えられ、それを後輩に伝えられる助産師になりたい ▶ 大学院で助産師の仕事の幅広さがわかり、なりたと思う助産師の姿がある
実践場面での判断・ケア技術	期間が空くことや施設差に感わされず分娩介助ができる	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 分娩介助の間隔が空いても学生時代の経験を思い出しながらやればできるという自信になっている ▶ 期間が空いたり実習病院との施設差があると緊張感はあるが、基本は同じと思えて焦らない
	超音波検査の判読ができる	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 超音波プローブを動かす医師の手の動きから何を探索しているかを理解できる ▶ 画像を判読して妊婦に説明できる
	退院後の予測が立てられる	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 育児期継続事例で産後6か月間受け持った経験を通して、退院後の児の成長・発達予測が立てられる ▶ 継続事例実習で経験した退院後の経過から、入院中うまく授乳できない人でも少し先の見通しを伝えられる
	他の新卒助産師との技術差は感じない	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学院卒かどうかによる他の新卒助産師とのケア技術の差は感じない ▶ 他の同期入職者より自分がうまく分娩介助できているという実感はないが、不足はないと思う
	複数の対象者を受け持つとあたふたする	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 複数産婦を受け持ち、記録などの業務をしていると産婦のそばにいる時間が作れない ▶ 分娩進行中の産婦、異常妊婦、褥婦・新生児を同時に看るのはできなかった ▶ ケアが重なると優先順位がつけられなかった
人間関係やチームワーク	母乳に関するケアがわからず自信がない	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 授乳時に褥婦から声をかけられても応える自信がない ▶ 自然に母乳が確立していかない褥婦のケアの方法がわからない ▶ 臨床での授乳ケアを自分が担ってみて、初めて知りたいことが具体化した ▶ 実習病院と就職先の病院のやり方しかわからず、他の病院のやり方を知りたいと思う
	ケア対象とのコミュニケーションには困らない	▶ 妊婦さんと産婦さんとのコミュニケーションには困っていない
	大学院卒としての気負いは無用とわかり、肩の荷が下りた	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 入職当初は、院卒としてのプレッシャーを強く感じ、自分が認識する実力との狭間で苦しんだ ▶ 「院卒なのに」と実際に言われることはなく、気負わなくていいと気が楽になった
	上司や先輩には遠慮せず質問や依頼ができる	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 教えてほしいことがあれば遠慮なく質問や依頼ができる ▶ 受けた指導について納得できないことがあれば自分の考えを申し出て尋ねる
	ケア・業務改善の必要を感じてもまだ経験不足で言える立場にないと思う	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 業務負担を変更したら良いケアにつながると思うが、自分のやり方が悪いのかとも思い、堂々とは言えない ▶ 対象のためのケア手順を思いついても、まだ経験不足で言える立場にないと思う
表現力や向上心・探究力	プレゼンテーションで苦勞しない	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 伝えたいことを端的に文章や資料にまとめるのがスムーズにできる ▶ パソコンやパワーポイントの扱いに慣れている
	研究を身近に感じてケアの探索や発展に使える	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 疑問があると既存の研究論文など文献を検索し活用する ▶ 自分の課題論文の成果を臨床でのケアに活用している ▶ 病棟の研究について意見を求められたときは、自分なりの提案などで応じている ▶ 具体的な研究疑問にはまだたどりつけないが、研究的に明らかにすると看護に活かせると思え研究意欲が湧く
	日々勉強と思うからどんどん自分から求めていく	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「誰かがやっているから正しい」と鵜呑みにしない ▶ 自分なりの自己評価方法を決めて振り返る ▶ 先輩と同じアセスメント力をつけるには、他者評価も必要と思って積極的に意見を聞く ▶ 自分の考えと共に自発的に尋ねていけば先輩は細かく教えてくれる ▶ アセスメントやケアのバリエーションを探し、それが増えていく過程が楽しい

そんなに焦ることはないんだって、その2例があったから思えた。

と語ったことなどから抽出された。

【母乳に関するケアがわからず自信がない】は、母乳に関するケアについてわからないことは先輩助産師に確認しながら行動できるものの、介入の必要性を判断し、一人に対応する自信は持っていないことなどの語りが見ら

れたことから抽出された。

(3) <人間関係やチームワーク>

このカテゴリーでは、ケア対象との関係づくり、上司・先輩・同期入職者との関わり方、病棟でのチームメンバーとしての活動状況が示され、【ケア対象とのコミュニケーションには困らない】、【大学院卒としての気負いは無用とわかり、肩の荷が下りた】、【上司や先輩には遠慮せず

質問や依頼ができる】、【ケア・業務改善の必要を感じてもまだ経験不足で言える立場にないと思う】で構成された。

修了生の入職当初を振り返っての話では、【大学院卒としての気負いは無用とわかり、肩の荷が下りた】について、

すごく不安だった。「できなきゃいけない」みたいな、15例とったからとか、大学院出たから、人と違わなければいけないというプレッシャーが自分の中ではあった。(中略)「大学院なのに無駄に過ごしたね」みたいなことは絶対言われちゃいけないというのは、すごく自分の中で課してた。

と語り、周囲のイメージと自分が認識する実力との狭間でもがいていた様子が出された。しかし、実際にはそのように指摘されることはなく、先輩から温かく見守られていることなどに少しずつ気づいたことから、ありのままの自分でいいと思え、自在に質問したりお願いしたりできるように変化したことが語られた。

【ケア・業務改善の必要を感じてもまだ経験不足で言える立場にないと思う】は、

(日々の業務やケアで) まだやれていないことがたくさんあるのに発言できる立場でない

と語り、発言するのはもう少し経験を積んでからと考えていたことから抽出された。

(4) <表現力や向上心・探求力>

このカテゴリーは、発信したいことを的確に表現し、自ら学んでいこうとする取り組みの姿勢が示され、【プレゼンテーションで苦勞しない】、【研究を身近に感じてケアの探索や発展に使える】、【日々勉強と思うからどんどん自分から求めていく】で構成された。

【プレゼンテーションで苦勞しない】は、新人研修での発表の機会を振り返って、

(限られた時間の中で) 話す内容はこれぐらいとか、(中略) こういう話をすると面白いかもとか、そういうのが自然とあった。それは(大学)院でやって身についたことかなと思う。ある情報を集めてきてそれをどう調理するか、(中略) どうやったら伝わるかって、やっていてもそんなに苦勞しないと思ったりします。

と語り、大学院で獲得した公の場で説明する力の価値を意識した経験などから抽出された。

【研究を身近に感じてケアの探索や発展に使える】は、大学看護学部を卒業後、看護師としての就業経験なく大

学院に進学したことについて振り返り、

(臨床を経験してから大学院で学んだ方が) もっと意義のある研究ができたのではないかなと思うときもある。(中略) けど、何もわからないまま(大学院に)先に入ったのは、それはそれで良かった。(研究を)活用できる術を知ってから臨床に出れたから、働きながら、こういうこと知りたいと思ったら、ちょっと論文読んで「これはここまではわかってる」とか、「まだわかっていないところはどこかなだろう」とか。わからないと思ったら、自分なりに「こういう方法で調べたらこういうことがわかるかもしれない」とか、「でも、これはこういうことに問題がある」って思ったりもできる。

と語っていたことなどから抽出された。

修了生は、資格を持った助産師として一人で産婦を見ていく仕事の中で、助産師として自分に課せられる仕事の責任の重さを改めて実感していた。そのため、何事にも疑問を持ち、自ら振り返り、積極的に確かめていく勉強を続けることが重要と考え、自分の経験知が増えていく過程を楽しんでいると語った。

2) 修了生が受けとめている大学院での学び (表2)

修了生による自己評価の語りの中で、現在の自分の助産実践能力の背景として受けとめられていた、大学院での学びを表2に示した。その内容は主に、大学院で受けた教育の内容・方法、実習での経験や研究を学んだ意義等であった。特に、実習に関する内容では、分娩介助に関する学びとして、10例以降に広がってくる分娩介助技術の視野の違いや、13例の介助経験から半年後に2例の介助を経験することの意義、助産所での実習の意義、超音波検査等の特定技術を習得できた強み等とともに、母乳育児に関する学習の不足が出された。

3. 上司へのインタビュー結果

1) 大学院修了生について上司が感じること (表3)

上司のデータを修了生と比較しながら分析した結果、修了生と同様に、<助産師としての志向性>、<実践場面での判断・ケア技術>、<人間関係やチームワーク>、<表現力や向上心・探究心>の4つの視点に分類された。

(1) <助産師としての志向性>

上司が感じる修了生のこの能力は、【助産師としての意識を強く持っている】、【お産が好き、助産師の仕事が好き】、【助産実践を確実に成し遂げる】と評価されている

表2 修了生自身が受けとめている大学院での学び

テーマ	意見・考え (斜体はnegativeな意見)
大学院での学び方について	<ul style="list-style-type: none"> ・病院助産師、開業助産師、教員を含むいろんな助産師に出会い、助産師の仕事の深さ・幅広さがわかった ・多くの授業、ゼミ、自分の研究の中で、たくさんの文献と触れ、プレゼンテーションを繰り返したことは大変だったが、やって良かった ・文献を調べて何事も根拠を調べていく作業が、研究などの授業で習慣化した
分娩介助実習について (全体を振り返って)	<ul style="list-style-type: none"> ・分娩第1期のケアをいろんな事例で十分経験できた ・分娩介助後に時間的余裕があったので、1例1例を指導者や教員と客観的に振り返ることでいろんなアセスメントや分娩の進め方を学べた ・分娩介助実習を通して、自ら積極的に指導者と関われば指導者は懸命に応えてくれると学んだ ・指導者と1対1で関わる機会が多く、うまく関わればストレスなく動けると自分の傾向がわかった
(15例分娩介助したことの意味)	<ul style="list-style-type: none"> ・10例以降の5例は対象を冷静に見られ、情報収集の幅が広がって、産婦の持ついろんな因子を統合し分娩進行を予測できるようになった ・10例以降は、それまでの10例で経験した諸々のことを持ち出してきて、活かしながら応用を考え、それを実践に移すことができた ・8例くらいまでは2つの命も怖いばかりだったが、10例を超える頃から自分に見えること・できること、課題が明確になった ・15例介助したことで、事例が変わっても基本は同じと確認できた
実習に関する内容	<ul style="list-style-type: none"> ・期間が空いても介助の感覚は変わらないと気づけ、入職後の介助も落ち着けた ・14例目に半年前の経験を思い出し、15例目では13例目までの感覚・自分の考え・アセスメントを全部使って介助できた ・10例目までは新しい体験が多く、経験の活用もうまくできなかったもので、10例を超えてからの半年のブランクで良かった
助産所実習で分娩に関わった経験について	<ul style="list-style-type: none"> ・家族の中でのアットホームな分娩の魅力を発見できた ・お産はリスクもあるが、すごく自然にも産めるということを体感できた ・病院と両方見られたことで双方のお産の良さや必要性を改めて認識でき、分娩施設に対するイメージの偏りがなくなった ・自分の仕事をうまくマネジメントしていく助産師の仕事ぶりを知り、敬服した
母乳に関するケアの学習について	<ul style="list-style-type: none"> ・継続事例実習で、入院中直接母乳をうまく飲ませられなかったケースが完全母乳になっていく過程を長期に渡って直接見ることができ、入職後の入院中のケアに活かしている ・入院中にしっかり関わって全員母乳が確立していくケアとはどのようなものか、病院入院中の母乳ケアのスタンダードがわかる実習をさせてほしい ・分娩介助で精一杯で、母乳ケアについての自分の関心が低かった ・分娩介助だけに集中してしまい、教員に質問できる環境を有効活用できなかった ・自分が受け持った継続事例に起こらなかったことは理解できていなかった
実習時の受け持ちの仕方について	<ul style="list-style-type: none"> ・学生時代はずっと1人の産婦のそばにいて分娩進行状態を知り、産婦の満足を得てきたが、臨床で複数の産婦や同時に妊婦・褥婦を受け持ち、戸惑った
研究に関する学びについて	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼性・妥当性が高い研究の活用や、ケアの根拠を文献で裏付けて客観的に見る大切さを学んだ ・関心があることを研究でき、研究の楽しさを見つけれられたし研究をきちんと学んだという自負がある
特定技術の習得について	<ul style="list-style-type: none"> ・超音波検査法の学習は、学内演習と妊婦に実施する実習があったことで画像を正確に理解でき、胎児についての説明など入職後に妊婦の精神的ケアへの活用ができて強みになっている ・新生児蘇生術「専門」コース研修は助産師にとって必須と入職してからわかり、大学院でライセンスが取得できてよかった

た。

大学院を含む様々な助産師養成課程出身の新卒助産師を、毎年複数受け入れている上司は、他の課程出身者と比較して、

助産師としてのポリシーというか、ある程度、自分の「助産師とは」というものを、曲がりなりにも新人なりにも持っているのかなという感じはしますね。

(中略)(分娩介助の場面で)自分の考えとか、診察の所見、アセスメントとかをきちんと医師に伝えられる場面がいくつかあったみたいで。

と語られた。更にまた、大学院で助産師教育を修了した新卒助産師を数年受け入れてきた経験を踏まえた印象と

して、学士課程の中で助産師教育を修得した人に比べると、入職時にはあまり差がないが、しかし、2年目以降では志向性の強さによる違いが出てくると感じる事が述べられた。

一方で、「新人という立場上、病棟に遠慮して、妊産褥婦の視点でなくスタッフ視点に合わせがち」との指摘もあり、

病棟の空気や業務に流されず、本来自分がやりたかった助産師として大切にしたいことや信念を忘れずに成長して欲しい

と、今後に期待されていることが語られた。

表3 修了生についての上司の評価

カテゴリー	サブカテゴリーを説明する代表的な語りの要約 (斜体はnegativeな語りの要約)	
志向性	助産師としての意識を強く持っている	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 自分なりの助産師観をしっかり持っている ➢ 将来の自分の助産師像がある ➢ 助産師としての今の自分の評価・課題・目標がはっきりしている
	お産が好き、助産師の仕事が好き	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 妊産褥婦にじっくり寄り添うことからケアを編み出していく ➢ 助産師という職業への思い入れや意欲が強い
	助産実践を確実に成し遂げる	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 助産実践に必要な文献を検索・収集し、大いに活用する ➢ 慌ただしい状況でも逃げ出さず弱音を吐かずやるべきことをやる
実践場面での判断・ケア技術	産婦のアセスメント能力や分娩介助技術が他の新人と同等にできる	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 分娩介助の場面で、自分の考え、診察の所見、アセスメントをきちんと持っている ➢ 分娩進行状況と自分がしたいことを報告できる ➢ 胎児心拍をガイドラインに基づいてきちんとみている ➢ 分娩介助技術は新卒助産師の目標評定に達している
	産後のケアが遜色なくできる	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 授乳介助はでき、母乳ケアに関しては相談しながらできているので心配はしていない ➢ 他のスタッフの介助を見ながら、自分でも介助方法を模索できている
人間関係やチームワーク	妊産褥婦との関係づくりが良い	<ul style="list-style-type: none"> ➢ きちんと説明するなど、産婦に優しい ➢ 入院したばかりの妊婦や精神的に不安定な妊婦に寄り添い、良い関係性が築ける ➢ 新人に対して向けられやすい苦情が来ない
	良くない点を指摘されると素直に受けとめて改善したり指導を吸収したりする	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 改善が必要な点について指摘されると素直に受けとめて反省し、直せる ➢ 良くないと指導されたことは素直に吸収することができる
	良くも悪くも他のスタッフとの協調性がある	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 自分の役割を果たした上で他のメンバーの役割を気遣える ➢ 人間関係でトラブルを起こすことはない ➢ 自分がメンバーでない研究でも文献を探したり意見を伝えたりしてくれるので頼りにされる ➢ 新人としての自分の立場を考え過ぎて遠慮してしまう
表現力や向上心・探究力	自分の伝えたいことが伝わるように表現する	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 発表の資料づくりやプレゼンテーションの能力が高い ➢ 自分の考えているアセスメントとケア方針をきちんと医師にも伝える
	自分の課題到達に向けて建設的に学んでいく	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 与えられた課題をこつこつとクリアしていく ➢ 自らこまめに詳細に振り返り、次の方向性を見つけようとする ➢ 自分なりのアセスメントや行動を先輩に伝え、積極的に助言を得ようとする
	1つ1つの現象・できごとを深く追究する	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 先輩の教えや自分の判断根拠となる文献を探索し相談に使う ➢ 1つ1つをじっくりと考える力がある ➢ 物事を自ら考えて調べて質問して進んでいく

(2) <実践場面での判断・ケア技術>

この能力は、【産婦のアセスメント能力や分娩介助技術が他の新人と同等にできる】、【産後のケアが遜色なくできる】で構成された。

上司は、新卒助産師全体に対して、基本的な看護技術を大学で体験していない新人が多いなどの理由から、技術力は臨床で教えるしかないと考えており、入職時はあまり期待していない現状にあることが語られた。また、大学院で助産師教育を修了した助産師に対しても、大学院卒だから特別できてほしいとは思っていないことや「知識は学校で、技術は臨床で」との考えが示された。

(3) <人間関係やチームワーク>

ケア対象との関係性の評価は、【妊産褥婦との関係づくりが良い】が抽出された。産婦や妊婦にきちんと向き合い、良い関係性が築けていることや他の新卒助産師に比べ苦情が来ないことが次のように語られた。

患者さんのニーズというか、要求にその場その場で

きちんと考え、行動できているから、(新人でも)そんな突飛な行動をしたり、違ったことをしたりしないから、(中略)きちんと対象者の人に合ったケアができていくから、こういう感じ(苦情が来ない)なのかな。

しかしながら、別の修了生については、対象の方に慣れてくると相手への言葉遣いが馴れ馴れしくなってしまうとの指摘もあり、今後の課題となっていた。

上司・先輩・同期入職者との関係性については、【良くない点を指摘されると素直に受けとめて改善したり指導を吸収したりする】、【良くも悪くも他のスタッフとの協調性がある】が抽出された。

これまで大学院修了者を複数受け入れてきた上司は、(出身)学校がそういう感じなのかもしれないけど、本当に素直に聞いてくれる部分が良かったなあと思って。(中略)この子だったら育つだろうと思いますよね。

表4 上司が考える〈大学院での助産師教育一般〉に対する希望・意見

-
- ▶分娩介助、母乳ケア、全てにおいて学部のカリキュラムではできない多くの経験をしてきてほしい
 - 継続事例は2例以上体験し、
 - ・妊娠初期から継続的に妊婦を全人的にみて保健指導やケアができるようになってきてほしい
 - ・退院後の生活を見据えた産後入院中の保健指導ができるようになってきてほしい
 - 分娩介助について
 - ・医療介入のない自然分娩をしっかり体験してきてほしい
 - ・正常分娩は1人で介助できるレベルに達してきてほしい
 - 産後・育児期のケアについて
 - ・産褥入院中の情報提供が自信を持ってできるよう、妊産婦を取り巻く地域の状況や母乳外来での母子の状況など、退院後の様子を実習で体験してきてほしい
 - ・様々な授乳状況にある褥婦の気持ちを聴く体験をしてきてほしい
 - ・正常な乳房・乳頭であれば、授乳介助はできるように学んでほしい
 - ・新生児の検温・沐浴はできるように学んでほしい
 - ▶正常・異常を見極める基本的な学力（知識）を強化してきてほしい
 - ▶研究について教育的・リーダー的な立場になれる力をつけてきてほしい
 - ▶大学院卒は管理者になっていくと思うが、管理的視点は若い時からの訓練が大切なので、管理的な視点を身につけてきてほしい
-

（院卒の新卒助産師で、）プライドから来るものがすごく大きくて、インシデントっぽいことがあっても、なかなか自分の非を認められないという傾向の子がすごく多くてね。でも、あの子はそうではない。ちゃんと指摘すれば、「はい」って言うし、ちゃんとそれを直せるし、そういう意味では成長してきている。

と語られ、素直さの成果としての育て甲斐と成長の早さが評価されていた。

自分の考えや伝えたいことは他のスタッフや他職種にきちんと直接伝え、適切にコミュニケーションが図れるものの、病棟会など公の場で意見を述べることについては、他の新卒助産師同様、「なかなか発言がない」と評価されていた。上司は、修了生と個人的に話をする中で、病棟の業務やケア方針等に対する考えや気づきを修了生が持っていると感じたことや、新人が発言できる病棟側の土壌づくりの必要性について述べるとともに、今後の積極的な発言や、業務改善・ケアの質の向上を目指した活動を期待されていた。

(4) <表現力や向上心・探求力>

この能力は、【自分の伝えたいことが伝わるように表現する】、【自分の課題到達に向けて建設的に学んでいく】、【1つ1つの現象・できごとを深く追究する】で構成された。これらは、

他の人（新卒助産師）にあった事例とかで、振り返って聞いてくるときもある。自分のこととして、「じゃあ、こうこうこうだったら、どうしたらいいですかね？」とか。自分がやった分娩に対しても「あのとき私はどうすれば良かったんですかね？」と。（新

卒助産師全員で）比べれば、Bさん（修了生）が一番きちんとそれをあとからレビューする、振り返りができる気がする。

看護技術だとか、助産技術だとかを、本当にコツコツと自分自身の行動を振り返ったり、次につなげたりしていたので、一般の大学とか、専門（学校）卒の助産師よりも、すごくマメに振り返り、自分自身に戻し、フィードバックしながら考えるなあと思って、

などの語りから抽出された。

2) 大学院での助産師教育一般に対する希望・意見（表4）

上司によって語られた大学院での助産師教育一般に対する希望・意見を表4に示した。分娩介助は正常をしっかり学び、異常を見極める力が求められる。更にまた、継続事例での妊娠期ケアや母乳育児に関する幅広い見方ができるような素地に加えて、研究や管理の基本的な力を養ってることが期待されていた。

IV. 考 察

修了生の所属施設は全て大学病院を含むいわゆる総合病院であったが、病院組織の規模や地域での役割、病棟の規模や対象診療科等は様々であった。修了生のこの1年間の体験においても、入職当初から分娩介助を経験している修了生や他科での数カ月のローテーションを経てから産婦人科に配属された修了生など違いが見られた。

自己評価や上司の評価にもこのような違いが影響していると考えられるが、現在の新卒助産師を取り巻く環境⁷⁾の1つとして以下のように考察する。

1. 修了生の能力に対する評価と期待

1) 修了生の助産実践能力と大学院で学んでいること

本研究の結果では、修了生に対して上司は、助産師としての意識が高いこと、他の課程の修了生とも遜色のない技術的能力を備えていること、対象とのコミュニケーションにも問題なく、仲間とも協調し合えること、自己の向上や実現に向かって建設的に学んでいこうとする姿勢があることを感じていた。これらは修了生の自己評価において、助産師としての仕事にやりがいを感じ、学生時代から培ってきた助産師観を膨らませ、他の新卒助産師との差を感じない技術力と、良い人間関係の中で自発的に学びながら自己成長を遂げていることを実感していたことに一致している。また、それは学士課程での助産師教育修了者と大学院修了生の特徴を比較した研究⁸⁾の結果ともほぼ同様であった。このことから、今回の修了生も、一般的な新卒助産師の能力を十分満たし、これまで言われてきた大学院修了生としての能力の一端を確認したと言える。

分娩介助実習は一般に、毎回異なる臨床実習指導者と1対1で密に関わり、主体的な判断力を養う学習が主となっている。このような実習形態を通して、学習の能動性と人間関係の調整能力が培われ、入職後も自分のアセスメント力・技術力の向上に向けて、自分なりの探究や先輩助産師の指導を仰ぐ姿勢が身についている様子が窺えた。先輩からの客観的な評価を受け入れ、自らの実践を振り返る行動は生涯学習の基本であるが、更に、文献を通して1つのテーマを明らかにしていく大学院での学び方が習慣化され、行動化されていることは大学院で十分に時間をかけた学びの成果と言える。

研究に関する能力では、就職1年目であるために、研究の実施に直接携わってはいなかったが、日頃の文献検索や活用の力が評価されて、期待されてもおり、修了生は、研究チームに情報を提供する役割を自ら進んで果たしてもいた。佐々木は、大学院で助産師教育を受けた者の役割で、「現場に研究的思考を持ち込み、実践を変える役割を担っていることを自分たちがまず自覚し、周囲と協力しながら研究、ケアの実践や質の向上に努める必要がある⁹⁾」としている。今回の結果においても、上司からは、研究的視点で病棟のケアを見つめていく役割が期

待されていることが示され、ニーズに合った修了生の活動が確認できた。

新人研修や症例検討会などでの修了生のプレゼンテーション能力は、自己・上司のいずれからも、うまくできていると評価され、大学院での学び方が実践に役立っていることがわかった。また、そのような学びが、大学院の2年間で積み上げ達成してきた成果として自信となり、現在の仕事の中でやる気にもつながっていると考えられる。中本らは、入職後3~4ヶ月頃の新人助産師の職場適応に影響する要因の調査結果から、卒前の助産師教育における課題として「学習者自身による主体的な振り返りと体験の意味づけの習慣化」、「適切な自己評価スキルの習得」及び「表現能力の獲得」の3点を挙げている¹⁰⁾。本研究で明らかになった結果から、大学院教育ではこれらの課題が達成できていると言える。

2) 大学院における助産師教育への示唆

本研究参加者の修了生が、現在の自己の助産実践能力を評価する中で、その背景になっていると受けとめていた大学院での学びのうち、学習効果が高かったものとして、分娩介助実習における「15例の分娩介助」及び「13例介助後半年を経ての2例の介助」、助産所実習での分娩への関わり、特定の技術として習得した超音波検査法の学習、新生児蘇生術「専門」コース研修の受講が挙げられていた。

大学院における助産師養成課程には、助産師国家試験受験資格取得のための単位取得と、修士号の学位授与に見合う研究能力及び高度実践能力が求められる。平成24年度の指定規則改正により助産師養成を行う課程の修了要件単位数が増加し、カリキュラムの過密化が進行することが予測されている¹¹⁾が、本結果から、助産実践における技術的な能力の保障として、学生自身が自信を持てる能力を維持するためには、2年次後半の分娩介助実習の実施など、カリキュラム上の量的・時期的な実習の工夫が必要であることが示唆された。また、助産所実習での学びは、対象に応じて具体的なケアを妊産婦毎に変化させていくことを直接学べる経験に加え、マネジメント力や活動の幅広さの学びにもなり、修了生にとって助産師としての志向性をより強めることにつながっていた。現代の妊産婦の多様なニーズに応えることやハイリスク妊産婦への対応能力は、大学院で強化すべき高度実践能力として挙げられている¹²⁾が、それらの能力を病院と助産所の双方で学べるプログラムが修了生からも求められ

ていることが今回明らかになった。大学院における助産師教育の特徴として、これらの教育内容が強化されていくことが望ましい。

大学院での学びに対する現在の助産実践能力について、修了生自身の自己評価で不足していることが明らかになったのは、母乳育児支援に関する能力であり、関連する実習強化の必要性が示唆された。これは、中島らによる研究¹³⁾と同様の結果であった。上司からの評価では、母乳育児に関する修了生のケア能力については心配されていなかったが、臨床現場では入職後即座に、正常な褥婦を対象とする褥室勤務者として機能できることが求められる。臨床におけるより高度な助産実践能力の獲得に向けた基礎的ケアの学習強化の必要性が示唆された。

2. 専門職である助産師としての強み

上司は修了生に対して、妊産褥婦とじっくり向き合い、対象から求められているケアや必要なケアを感じ取る力、その人個人がやりたいと思う姿に寄り添えることを評価していた。日本助産師会は、日本の助産師に求められる必須の実践能力「助産師のコア・コンピテンシー」で、4つの構成要素を示し、その1つに〈倫理的感応力〉を位置づけている。倫理的感応力とは、「対象となる人々の行為や言動の意味を心に感じ、対象とかわる中で援助を必要とするニーズを見極め、対象と情報を共有しながら対象にとってより善い選択ができるように支援していくこと」¹⁴⁾とされている。今回の結果である上司からの修了生に対する評価は、この倫理的感応力の基本的姿勢を体現していると言える。

このような倫理的感応力の基本的姿勢が養われた背景には、時間的余裕を持ってじっくりと1人の対象のケアに関わる実習を体験していることが挙げられ、長期にわたって濃厚な実習ができるという、大学院2年間の教育の成果とも言える。平成24年度入学生以降は、助産師国家試験受験資格取得の要件が28単位となり、5単位の追加によっても一層このような教育の成果が期待できる。

今回の結果では、修了生全員が卒業後1年間同じ職場で仕事を続けており、今後についても離職を考えている者はいなかった。助産師として職業を継続していく熱意は、上述のごとく職場に適応しやすい素地が育まれたことや、職場で助産師の職業モデルを見出し、そこに向かう自己の成長を楽しみながら助産師としての将来の自分を描いていた職場環境が影響しているとも考えられる。大石らが助産師教育の専門職大学院修了生に対して行った調

査¹⁵⁾で、「専門職大学院の修了生は離職率が低く、助産師としての覚悟を強く持っており、助産師のアイデンティティが育っている」とした結果と同様の効果が得られていると考える。また、修了生自身の「素直さ」も臨床側としての卒業教育の進めやすさや人間関係の築きやすさにつながっていたが、今回の修了生全員が、大学4年卒業に引き続いて大学院に進学し、助産師教育を受けたという経過にも関係しているかもしれない。

3. 本研究の限界と今後の課題

今回の調査結果は1大学院の修了生に限定した評価であり、対象者数も少ないため、今後は本研究を基盤にデータを蓄積していく必要がある。教育の効果を検討する修了生や上司による評価は、カリキュラムの変更に伴って継続し、大学院における助産師教育の内容・方法に反映していく必要がある。

V. 結 論

本研究では、大学院助産師養成課程修了生の卒業後1年目の時点における助産実践能力について、修了生本人とその上司の視座から評価を明らかにした。

その結果、修了生の助産実践能力は、〈助産師としての志向性〉、〈実践場面での判断・ケア技術〉、〈人間関係やチームワーク〉、〈表現力や向上心・探究力〉の4つの視点に分類された。その評価内容では、修了生本人・上司ともに、「助産師という職業に対する意識が高い」こと、「一般的な新卒助産師と同等の判断・技術力を有すること」、「妊産褥婦に寄り添える姿勢や周囲の関係者との円滑なコミュニケーション能力がある」こと、「上司や先輩助産師からの指導を素直に受けとめて建設的に取り組む態度がある」ことが明らかになった。また、修了生の自己評価を高め、入職後のより高度な助産実践能力を目指すための教育内容として、母乳育児支援に関する学習強化の必要性が示唆された。

なお、本研究は、平成23年度愛知県立大学看護学部研究奨励費の助成を受けて実施したものである。

謝 辞

いつにも増してお忙しい年度末の時期にも拘わらず、本研究にご協力くださいました研究参加者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省大学審議会：21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学— (答申要旨). 1998.
- 2) 公益社団法人 全国助産師教育協議会：平成23年度事業活動報告書. 1-4. 2012.
- 3) 特定非営利活動法人 日本助産評価機構：文部科学省 平成20年度 大学評価研究委託事業「助産分野における就職3年未満の実践能力評価—大学院修士課程と大学課程の比較—」報告書. 4-23. 2009.
- 4) 佐々木美喜：看護師経験を持つ大学院助産課程を修了した新人助産師の臨床での体験. 日本赤十字看護大学紀要. 26：79-89. 2012.
- 5) 大石時子. 平山恵美子. 高橋弘子. 本宿美砂子. 今崎裕子. 津田万寿美. 宮本涼子. 園生陽子：専門職大学院における助産教育の評価. 日本助産学会誌. 25(3)：77. 2012.
- 6) 特定非営利活動法人 日本助産評価機構：「助産専門職大学院認証評価」ハンドブック. 28-45. 2009.
- 7) 公益社団法人 日本看護協会：Chapter I 新人看護職員研修ガイドラインと「新卒助産師研修ガイド」. 「新卒助産師研修ガイド」第1版. 6-14. 2012.
- 8) 前述書3). 4-23.
- 9) 前述書4). 87.
- 10) 中本朋子. 野崎美紀. 重安日登美. 柳美穂子. 山下満枝：新人助産師の職場適応に影響する要因と助産師教育における課題. 山口県立大学学術情報. (2)：48-52. 2009.
- 11) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告. 16. 2011.
- 12) 公益社団法人 全国助産師教育協議会 教育検討委員会：大学院で目指す高度実践能力として強化すべき教育課程（科目内容）に関する検討. 平成22年度事業活動報告書. 6-15. 2011.
- 13) 中島久美子. 國清恭子. 阪本忍. 新井洋子. 常盤洋子：新人助産師の視座から捉えた分娩介助・継続事例実習指導の課題. 日本助産学会誌. 23(1)：5-15. 2009.
- 14) 社団法人 日本助産師会ホームページ：助産師のコア. コンピテンシー. http://midwife.or.jp/b_attendant/competency_index.html. [参照日：2012/09/25]
- 15) 前述書5). 77.